

# 『源氏物語』の乳母・宣旨の娘の背景 ―父宮内卿を始点として―

上村 菜由

## 一、はじめに

『源氏物語』の乳母・宣旨娘背景―父宮内卿を始点として―

『源氏物語』には源氏の実の子とされている三名の人物、夕霧、冷泉、明石姫君が登場する。本稿ではそのうち源氏唯一の娘である明石姫君に近侍する乳母を取り上げる。『源氏物語』に登場する女君の乳母の場合、母が傍にいる養君よりも、いない養君の乳母の方がより詳しく言動が記される。しかし「宣旨の娘」と称される乳母は、養君の傍には常に母がいるにもかかわらず、様々な場面で散見される例外的な乳母である。その養君である明石姫君は、源氏と明石の君という女性との間に生まれた。明石の君の父は受領であり、この姫君を后にと望む源氏にとつてその出自は満足のいくものではなかった。そのため源氏は姫君を京に引き取り、紫の上に養育させ、入内するにふさわしい身分と教養を与えた。

源氏と紫の上のもとで后がねとして大切に育てられ、東宮に入内した姫君は、寵愛を得て位を極めていくこととなる。

このような姫君の乳母については少なくとも三名の存在が想定されているが、なかでもよく知られているのが次のように紹介される宣旨の娘である。

さる所にはかばかしき人しもありがたからむを思して、故院にさぶらひし宣旨のむすめ、宮内卿の宰相にて亡くなりし人の子なりしを、母なども亡せてかすかなる世に経けるが、はかなきさまにて子産みたりと聞こしめしつけたるを、知るたよりありて事のついでにまねびきこえける人召して、さるべきさまにのたまひ契る。(濔標卷 二八七頁)

姫君が生まれたことを知った源氏は、明石のような田舎ではしつかりとした乳母などいないであろうと考え、宰相であった父を持ちながら、両親に先立たれ、さらに幼子を抱えて不如意な生活を送っていた宣旨の娘を姫君の乳母に選定する。そのため宣旨の娘は下向することとなるが、出立の日には源氏自ら宣旨の娘の家に立ち寄り、戯れ、歌を交わす。この「戯れ」については情事を指すとも、時間的にそれはなかったとも解されているが<sup>2</sup>、いずれにしてもこの乳母は源氏本人の見送りを受けて京を発つ。そうして下向した乳母は明石の地で大変歓迎され、養君の母である明石の君とは「語らひ人」として良好な関係を築いていく。その後姫君は源氏のもとに引き取られて二条院へと移るが、乳母もそれに同行する。また若菜下巻での住吉詣の場面にも宣旨の娘と思われる乳母が登場しており<sup>3</sup>、姫君入内後も変わらず仕え続けていたと想像される。以上のように、母ある子の乳母でありながら宣旨の娘の言動はたびたび描かれており、乳母に選定される過程や養君の父である源氏、母である明石の君とのかわりにまで言及されている。

このような有り様は他の乳母たちからは確認できず、『源氏物語』以前の作品においても見当たらないなか、わざわざ宣旨の娘の素性を明らかにするのは、大切な后がねである明石姫君の乳母としてその出自が重要となつてくるためだと指摘されている<sup>4</sup>。

そうであるならば、宣旨の娘の出自や背景はどのように設定されており、そこにはどのような意味があるのだろうか。登場時すでに故人であった乳母の父・宮内卿に注目して考察したい。

## 一、宮内卿について

先の引用部からもわかるように、宣旨の娘の母は故桐壺帝に仕えた宣旨であり、父は宮内卿と宰相を兼ねた者だった。この両親について先行研究では、宣旨の娘には出仕経験があるが、母もかつて宮仕えをしており、その母から薫陶を受けた娘の知識や教養が入内後の姫君にとつて大変重要であったことや、宣旨の娘の母が桐壺帝に奉仕していたことが、桐壺帝の御世とのつながりを強く意識していた源氏にとつて好都合だったことが指摘されている<sup>5</sup>。また宮内卿宰相であった父については、上達部の娘が乳母を務めることによつて養君である姫君の格を上げようとする意図があつたようである<sup>6</sup>。

そこで本章では「宮内卿」という役職に着目し、『源氏物語』やそれ以前の作品に描かれる宮内卿、また実際に宮内卿を務めた史上の人物を調査することによつて、宣旨の娘の出自についてより考察を深めたい。それでは初めに『源氏物語』以前に描かれた宮内卿についてであるが、その用例は乏しい<sup>7</sup>。たとえば『うつほ物語』では二名の宮内卿が登場するが、そのうちの一人が在原忠保である。この人物は勢力がなく不如意な生活を送っており、その貧しさは娘婿である源仲頼の出立の用意のために御佩刀を質に入れて金を工面するほどだった。この困窮は嵯峨の院に対して過失を犯したためであると後に語られるが、具体的にどのような過失だったのか記されることはない。そして二人目は宮内卿兼覧という人物である。「年七十なる」とあり、かなり高齢での任官であるこ

とはわかるが、姓は明かされず、樓の上下巻に登場するのみである。

また宮内の君という女房も登場する。あて宮に仕えており、三春高基に仲介を依頼される人物である。しかし宮内の君について詳しく語られることはなく、「宮内」という名が何に由来しているのかわからない。

仮に親族に宮内卿がいたことによるとしても、この女房は高基の仲介役としてしか現れず、高基もあて宮を手に入れることができなかったことから、ただの一女房としてしか描かれていないことがわかるだろう。

このように物語には用例が少ないが、在原忠保の置かれた状況は『源氏物語』の宣旨の娘を彷彿とさせる。詳しくは後述するが、宣旨の娘も姫君の乳母として選定される以前、幼子を抱えて困窮した生活を送っており、「人知れぬあばら屋」と言われるような家に暮らしていた。この両者の類似は興味深い、ひとまず史上の宮内卿から見えていきたい。まずは陳斐寧氏の見解を検討する。

陳氏は、宣旨の娘の父の「宮内卿」という役職に着目して「宮内卿」という出自を設定することで読者に何を語りたのか」と問題提起し、嵯峨朝の弘仁十二年（八二二）から後三条朝の延久元年（一〇六九）における歴代宮内卿を調査している。その当時の天皇、宮内卿名、就任年月日、出自、任卿本官、年齢・系譜の六項目を設け、藤原貞嗣から源経長まで二十名の人物を挙げる。そして全体として宮内卿は賜姓源氏の四位の者もしくは「致仕年齢を越えた文章生」が務めているという見解を示す。またこのような任官方針と、当時の文人は貧窮した生活を送るなか、宣旨の娘は「大きな所」に住んでいることを鑑みた結果、宣旨

の娘の父は四位の賜姓源氏であると述べる。

たしかに陳氏の提示する歴代宮内卿の一覧表によれば、上記のような任命方針を導き出すことも可能かと思われる。しかし私に宮内卿を務めた人物を改めて調査したところ、本稿末の「表」のような結果が得られた。

今回調査対象とした範囲は、上限を桓武朝（七七四年）、下限を『源氏物語』が執筆されたと考えられている十一世紀前半（一〇三五年）とした。また兼任していた役職については省略したが、宣旨の娘の父が宰相を兼ねていたため参議か否かのみ記した。年が飛んでいる箇所が散見されるが、それは六国史等に当時の宮内卿について記録が残っていないことによる。また一、二年程度記録のない空白の年があったとしても、その前後の年に同じ人物が務めていることが判明した場合は「推定」としてその人物が連続して着任していると解釈した。そして表中最下段に文章生出身者か否かを示した。

すると、陳氏の表と調査範囲の重なる弘仁十二年（八二二）から長元八年（一〇三五）の間に限っても、その任官数は陳氏の調査結果の十九名に対し、のべ三十五名が数えられた。また醍醐朝以降について、陳氏は、「淳和朝以来の「賜姓源氏」任官の先例を無視し、三善清行が任官されなければならない理由はどこにあるのだろうか」と問題提起し、その答えを清行が文章生出身であることに求めている。そもそもこのような問いが発生するのは、陳氏の調査では、藤原貞嗣、源弘、源勤、源多、源冷、源興基、十世王に続いて三善清行の名が挙がるためである。しかし

管見によると、藤原貞嗣以下八名の間には、藤原氏や安倍氏、滋野氏などが存在する上、それ以前の時代に遡ればむしろそのほとんどが他氏である。また、今回の調査で判明した宮内卿歴任者全員について文章生出身か否かを調べることはとても困難であったため断言はできないが、少なくとも文章生出身者が宮内卿になったのは三善清行が初めてではない。そのため文章生出身であるか否かは任用方針にはかわらないと考えられる。

元々宮内卿とは、天皇や皇族の衣食住に関わる仕事を担う宮内省の長官であり、表からも明らかのように四位前後の者が就く役職だった。また氏に着目すると、平安初期には大伴氏や石川氏など様々な氏が登用されているが、次第に賜姓源氏や王が多くを占めるようになる。すなわち天皇と血縁関係のある者が務めるようになっていく。さらに年齢を見てみると、若くして就く者もいる一方、致仕年齢間近もしくは致仕年齢を超えて着任している者も確認でき、一見すると特徴などがあるようには思われない。

しかし、氏と着任した年齢、その時の天皇との関係を照らし合わせてみると、次のような傾向がうかがえる。まず、当時ではもう高齢と言えたであろう六十歳を超えている者を挙げると、大伴伯麻呂・石上家也・和家麻呂・菅野真道・多治比今麻呂・藤原貞嗣・百濟勝義・滋野貞主・高枝王・豊江王・忠貞王・十世王・三善清行・紀淑光・藤原元名・藤原守義・源道方の十七名となる。列挙してわかるように、彼らの氏に統一性はなく様々である。また「系譜」の欄をみると、空欄もしくは「祖父

の従兄弟」「祖父のハトコ」などとなっており、時の天皇とは近い関係にないことがわかる。

一方、若くして宮内卿の任にしている者<sup>1)</sup>は、藤原三守・源弘・源多・源勤・源冷・源覚・源興基・源道方<sup>2)</sup>の八名である。四十歳代前半の者を含めても、藤原緒嗣・橘氏公・源重光を加えた十一名であり、いずれにしても源氏が大半である。また時の天皇との関係も、源氏が多くを占めているのだから当然ではあるが、先の十七名とは異なり、オジやイトコなど比較的近い者がほとんどである。

よって致仕年齢に近い、もしくは致仕年齢を超えて宮内卿に就いている者は皇統との繋がりが薄く、反対に若くして任にしている者は、賜姓源氏など時の天皇の縁の者であると言えるだろう。それはすなわち宮内卿という役職が次第に実務を伴ったものではなく、名誉職化していったものとも考えられる。

以上が表から読み取れる任官方針であるが、これと『源氏物語』の宣旨の娘の父宮内卿を照らし合わせてみたい。ただし検討範囲は桐壺帝の準拠説の一つである仁明朝の嘉祥三年(八五〇)以降、約一五〇年間とする。

さて、範囲内の歴代宮内卿であるが、その多くが王や源氏、もしくは時の天皇や皇族に連なる者であることがわかる。宣旨の娘の父の年齢が明かされることはないため、先に見たように老若によってその出自を推し量ることは難しい。しかしこの約一五〇年間の補任傾向から、宣旨の娘の父も時の天皇(桐壺帝)と縁のある人物であり、名誉職として宮内卿

に任ぜられたのだと推測できる。

この「宣旨の娘の父宮内卿が桐壺帝と縁続きの人物である」という点については、導くプロセスは異なるものの陳氏と同じ見解である。しかし陳氏は賜姓源氏である可能性を指摘するに止まり、具体的な縁故に言及してはいない。そこで次章ではそこから一步検討を進め、父宮内卿と桐壺帝がどのような関係にあり得るのか考えていきたい。

## 二、源氏と宣旨の娘の関係—近親者の可能性

源氏が宣旨の娘を明石姫君の乳母として選定した際、この娘は「まだ若く」「はかなきさまにて子産みたり」とあり、源氏もこの時二十代後半だった。そのためこの二人の間に大きな歳の差はないと思われる。また先に触れたように、宣旨の娘自身にも出仕経験があり、宮中において源氏はその姿を見たことがあったという記述を前提とする。

それでは、まず想定されるのが父宮内卿と桐壺帝が「兄弟」<sup>1,2</sup>だった場合であるが、このとき桐壺帝の皇子である源氏からみると宮内卿はオジ<sup>1,3</sup>となり、宣旨の娘はイトコとなる。また桐壺帝からみれば宣旨の娘は姪となるため、その出自はとも高いものとなるだろう。そしてこのような関係であれば、源氏が以前宮中で宣旨の娘を見かけたことがあっても、源氏と宣旨の娘の年齢が大きく離れてはいないだろうことも、不自然なことではないと考えられる。

次に想定されるのは「イトコ」であるが、父宮内卿と桐壺帝がイトコであるならば、源氏と宣旨の娘はハトコの関係となる。源氏とは多少血縁関係が遠くなるようにも思われるが、宣旨の娘としては桐壺帝と血縁であることに変わりはないため、その出自は保障される。またハトコ同士ということは同世代である可能性が高いため、年齢的にも無理はないだろう。

ところが次はどうだろうか。「オジ・甥」の関係、つまり宮内卿の親が桐壺帝と兄弟だった場合である。このとき源氏と宮内卿がイトコとなり、宣旨の娘は源氏の従姪（イトコ違い）となるが、源氏と宣旨の娘の間にあまり年の差がないとすると、宮内卿の父が桐壺帝と歳の離れた兄弟であり、世代としては桐壺帝と宮内卿、源氏と宣旨の娘が一致する必要がある。しかしこの場合、宮内卿の父の存在や年齢について仮定や推測でしかない要素が多い上、先の二例に比べると宣旨の娘と桐壺帝や源氏の血縁関係が遠くなってしまう。そのためこの縁故は考えにくいと思われるが、一つの候補として挙げておく。

そして源氏の父系のみならず母系でたどる場合、つまり宮内卿は桐壺更衣と血縁があり、その縁故によって桐壺帝時代の宮内卿に登用された可能性も想定してみる。桐壺更衣には兄の律師がいるが、まずは宮内卿がその律師の子であるとしてみよう。しかしこの場合「オジ・甥」と同じく、桐壺更衣と律師、源氏と宮内卿が同世代となってしまうため、このような系譜が成り立つことも想定しがたいだろう。

あるいは宮内卿の親と桐壺更衣の親が兄弟であり、桐壺更衣と宮内卿

がイトコ、源氏と宣旨の娘がハトコであるとも考えられる。この場合源氏と宣旨の娘は同世代となる。そして桐壺更衣と明石の入道がイトコ同士、源氏と明石の君がハトコ同士であることから、源氏は自分とハトコとの間に儲けた子の乳母に、また別のハトコを採用していることとなる。源氏がかつて明石の君と手紙を交わす程度の間柄だったときに、女のほうから進んで出仕してくるのなら召人にでもしようと考えていたことを鑑みると、宣旨の娘が自分の縁者であったとしても乳母として明石に下向させることに躊躇いはないだろう。むしろ姫君を血縁者で囲繞することができるのだから、好都合だといえるかもしれない。

さらに明石の君と宣旨の娘がハトコ同士であるならば、先述したように良好な関係を築けたことも納得できるだろう。またこの二人は「語らひ人」の関係にあるだけでなく、源氏から明石方に送られてきた手紙を共に見ることもあり、それらの場面に明石の君への敬語が用いられていないことは注目に値する。その上宣旨の娘は姫君に同行して二条院へ移る際、明石の君と泣いて別れを惜しみ、互いに文のやりとりを約束して歌を交わす。この対等な交流や歌の応酬は、養君の実母と乳母という主従の関係でありながら、まるで友人のような気安さである。この主従意識の希薄さは、雇用主である明石入道が受領階級なのに対して宣旨の娘は宰相を父に持つ公卿の娘であるために、身分の上下が逆転していることに起因すると考えられている<sup>14</sup>。しかし実はそのような身分の逆転のみならず、両者が親戚関係にあり、明石の君と宣旨の娘はハトコ同士であるために親密な関係が築けたのかもしれない。

なお先行研究において桐壺更衣や明石入道が源氏である可能性が示唆されているが<sup>15</sup>、その場合彼らのイトコである父宮内卿もまた源氏となる。そうすると、宮内卿と桐壺帝との間に必ずしも密接な関係を想定せずとも、桐壺更衣の縁者である皇統に連なる者として宣旨の娘の父は宮内卿に任せられたと考えることも可能だろう。

またその場合、先述した『うつほ物語』の宮内卿在原忠保は在原姓であることから、宣旨の娘の父と同様に皇統から出た者といえる。そのうえ忠保は嵯峨の院に対して過失を犯したために困窮した生活を送っており、女御となったあて宮の進言によって齢六十ほどで修理大夫に任命されたことを望外の幸いとして喜んでいいる。そしてその任官を世の中の人からも驚き騒がれるほど落ちぶれていたが、『源氏物語』においても明石入道の父が「ものの違ひ目」にあつて没落したと語られる。この「ものの違ひ目」の余波は桐壺更衣の父にも及んだと指摘されているが<sup>16</sup>、宣旨の娘の父が源氏の母方と縁者ならば、宣旨の娘の一家も同様にその影響を被ったと考えられる。それは宣旨の娘が貧窮した生活を送っており、荒れ果てた人知れぬあばら屋に住んでいたことから想像されるだろう。もしかすると「ものの違ひ目」というのも、当時の帝や院に対して何か過失を犯したことを指す可能性があるのかもしれない。

以上のように見ると、宣旨の娘の父宮内卿と桐壺帝の縁故として考えられるのは兄弟またはイトコの関係である。また皇統に連なる者としては源氏の母桐壺更衣のイトコである可能性もあり、それらに伴って宣旨の娘は源氏のイトコやハトコであるとも考えられるだろう。

#### 四、源氏と宣旨の娘の背景

##### —一条朝の乳母と『うつほ物語』の乳母

源氏と宣旨の娘を近親者と仮定し、同様の例を探ってみると、まず想起されるのが藤原道綱の娘、豊子である。『紫式部日記』では所作や容貌などが優れ、教養ある者として語られる人物である。道長は家格を高めるために上達部の娘を自分の娘付きの女房や孫の乳母として求めており<sup>17</sup>、豊子は彰子に仕える女房の一人でありながら、一条天皇の皇子である敦成親王や敦良親王の乳母をも務めた。道長と道綱は異母兄弟であり、道綱の母の方が妻として下位ではあったが、ともに兼家の子であることに変わりなく、豊子の女房としての出自の良さは否定できない。また両者の娘である彰子と豊子はイトコ関係にある。つまり彰子はイトコを自分の女房とし、さらに自分の子の乳母としていたのである。

さらに『うつほ物語』にも母の近親者を乳母としている例が確認できる。藤原仲忠と女一の宮の娘である犬宮に近侍する乳母、「侍従」である。犬宮には誕生時に乳母として民部大輔の娘一人と五位程度の者の娘二人が召し集められたが、その後二名増員されたらしく、京極邸での秘琴伝授前には「御乳母五人」となっている。「侍従」とは増員された二名のうちの一人であり、京極邸にも同行していることが確認できるが、その素性は次のように記される。

侍従の乳母といふは、嵯峨の院の親王の、兵部卿にておはせしが御娘なり。故源侍従の、童にて忍びがたきなりし、一の宮の御はらからの宮の、いと忍びて、かたぢみじくうつくしげなれば、通ひたまひしに、乳をただしばし参りけれど、乳母とすべきまならずとて、名はつきたれど、宮のいとらうたき者にしたまへるなり。(楼の上下巻五二二頁)

侍従の乳母は嵯峨の院の皇子兵部卿の娘であり、故源侍従の恋人であった。そこへ女一の宮の兄弟が内密に通うようになり、犬宮の乳母としてしばらく授乳の役目を負うこととなった。しかし乳母とすべき出自の者ではないため、乳母と呼ばれてはいても、女一の宮の女房として召し使われているという。

ここで注目すべきは侍従が嵯峨の院の孫であり、兵部卿の娘であるという点である。実は犬宮の母女一の宮の祖父も嵯峨の院であり、父は院の子朱雀帝であった。よって兵部卿と朱雀帝は兄弟、侍従と女一の宮はイトコ同士となる。つまり女一の宮もイトコである侍従を女房とし、さらに自分の子である犬宮の乳母も兼務させていたのである。

ちなみに侍従のかつての恋人である源侍従仲澄の母犬宮は、朱雀帝と同腹の嵯峨の院の娘である。したがって侍従や仲澄、女一の宮やその兄弟らは皆イトコとなり、そのような身分の男を通わせていた侍従は、たとえ女一の宮の女房であっても乳母の役目を負うには非常に高貴であるといえるだろう。

犬宮は将来あて宮腹の東宮への入内が予期されている。東宮妃候補として犬宮自身の格を高めるために、それほどまでに高貴な女性を乳母として任用したのではないだろうか。

さて、以上の二例から宣旨の娘が源氏の縁者として描かれる背景を考えたとき、豊子の例については、宣旨の娘と豊子が共に高い出自と豊かな教養を有しており、源氏や道長がその期待を一身に注ぐ子の乳母であるという共通点が挙げられる。ところが『源氏物語』特に明石姫君の乳母を選定する濤標巻の執筆時期はおそらく敦成親王誕生前だろうとされている<sup>18</sup>ことから、豊子を宣旨の娘の準拠とすることは難しい。しかし、共に彰子に仕え、女房仲間として豊子と仲の良かった紫式部は、主人の近い血縁者であつても女房として出仕する場合があります、血縁者だからこそ出自や身元が保証されて重用される場合があるということを実験としてわかっていたのだろう。そのため、源氏にとつて大切な后がねである明石姫君の乳母に、敢えて源氏のイトコやハトコを選んだのではないだろうか。

また『うつほ物語』の例においても複数の共通点が見られる。

明石姫君を思い起こしてみると、后がねである姫君には少なくとも三人もの乳母が想定でき、そのうち宣旨の娘は明石から二条院へ姫君と共に移住する。一方、東宮への入内が予感されている犬宮の場合も三名、後に五名もの乳母が存在し、侍従は秘琴伝授の際に京極邸に同行している。

このように明石姫君と犬宮は、ともに将来東宮への入内が見込まれて

おり、臣下の娘でありながら複数の乳母がつけられている。また居を移すことがあつても乳母と離れ離れになることはない。さらに女一の宮と侍従がイトコ同士であることも共通の要素であることを考慮すると、源氏と宣旨の娘の関係は女一の宮と侍従を参考としている可能性が考えられる。

また『源氏物語』では二条院へ移住後、明石から宣旨の娘宛に衣装が贈られており、『うつほ物語』では秘琴伝授の最中、侍従は女一の宮から犬宮の様子を問う旨の手紙を受け取っている。このように母と子が離れ離れになった際に、乳母が両者の間に立つ存在として描かれていることを考え合わせると、明石の君と宣旨の娘、女一の宮と侍従も重なり合うだろう。

## 五、おわりに

さて、本稿では明石姫君の乳母である宣旨の娘の背景や出自を検討してきた。宣旨の娘の母は桐壺帝に仕えた宣旨、父は宮内卿宰相であり、母については宮廷内の実情に精通していることや、桐壺帝とのかかわりが指摘されてきた一方、父に対する詳しい言及はあまりなされてこなかった。

ところが此度『源氏物語』が書かれる以前の歴代宮内卿の補任傾向から、宣旨の娘の父宮内卿は皇統に連なる者であり、宣旨の娘自身は光源

氏のイトコやハトコである可能性が考えられた。

そして藤原豊子の例を考慮すると、紫式部が姫君の乳母を親の縁者に設定したのは、血縁者だからこそ出自や身元が保証されて女房や乳母として重用される場合があることを実際に見知っていたためである可能性が考えられる。だからこそ物語の光源氏にも自身の近親者である宣旨の娘を選ばせ、姫君の身近に保証された人物を配することで、姫君が将来入内するにふさわしい格と教養を身に付ける担保としたのではないだろうか。

また宣旨の娘は『うつほ物語』を参考としていたとも考えられ、養君の入内が想定されていることや、養君の親と乳母が血縁者であるという点で両者は重なる。

ただし豊子や侍従の場合は養君の母方と縁戚関係にあるのに対し、宣旨の娘は明石姫君にとって父方の縁者となる。これについては、乳母が母方の関係者であれば、たとえ乳母の選定過程に子の格を高める意図があったとしても、『うつほ物語』の侍従の例のようにちように授乳可能な者が身近にいたために乳母の役目を任されたとも解釈できてしまう。しかし父方であれば、当然養君の父親の息がかかった人物であり、子どものように養育するのか(源氏であれば姫君の入内を目論む)、その方針を把握しているはずである。したがって宣旨の娘が養君の父方の血縁者であったのは、この人物が出産後であり単に乳母の任に堪え得るためだっただけではなく、姫君の格上げと高度な教育を施そうとした意図がより強く反映されたためだろう。

以上、宮内卿を始点として宣旨の娘の出自について迫ることで、明石姫君の乳母と養君の両親が血縁関係にある可能性が想定された。また養君の親と乳母が近親者であり、その乳母が高い出自を有する例は一条朝の藤原豊子や『うつほ物語』の侍従にも見られ、それらから、将来を嘱望される明石姫君の乳母は血縁によって出自等が保証された人物であり、その人選は子の格上げや高度な教養を与えようとする親の意向が強く反映された結果と考えられた。『源氏物語』において出自等が唯一詳細に語られる乳母、宣旨の娘の人物像の一端として本論を提示してみた。

#### 註

(1) 宣旨の娘のほかに、宣旨の娘が派遣されるより前、すでに明石方で雇っていたらう乳母の存在が指摘されている(吉海直人「明石の姫君の乳母」『源氏物語の乳母学—乳母のいる風景を読む—』世界思想社、二〇〇八年)。また二条院への移住に際して「やむごとなき人の乳ある添へてまありたまふ」とあるように乳母が一人追加されている。

(2) 玉上琢彌『源氏物語評釈』(角川書店、一九六五年)、伊藤博「濔標」(山岸徳平・岡一男監修『源氏物語講座 三』有精堂出版、一九七一年)は情事があったとしており、小山清文「明石物語と(まつ)―宣旨の娘と中将の君をめぐって―」(『武蔵野女子大学紀要』二十六号、一九九一年)や三谷邦明「源氏物語・端役論の視角―語り手と端役あるいは源典侍と宣旨の娘をめぐって」(フェリス女学院大学編『源氏物語の魅力を探る』翰林書房、二〇

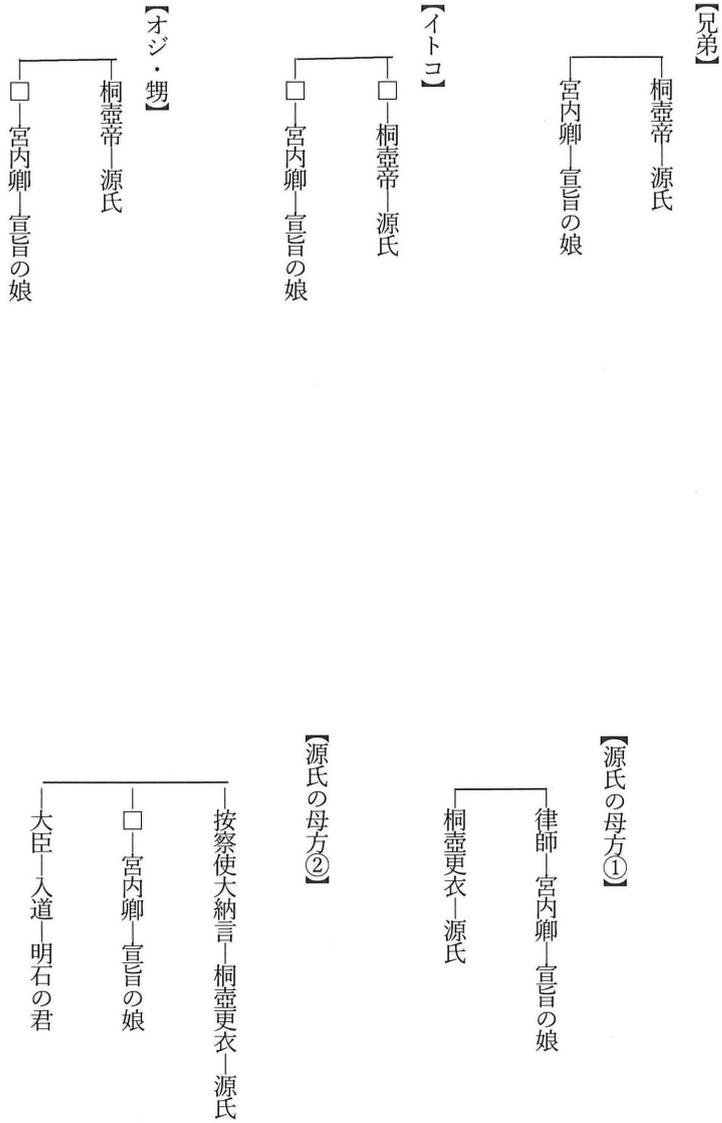
『源氏物語』の乳母・宣旨娘背景—父宮内卿を始点として—

- 二年)では直接的に述べられてはいないが、宣旨の娘は源氏の召人だった可能性が示唆されている。一方、藤本勝義「源氏物語の乳母をめぐる—その世界と論理—」(『文学・語学』一〇七号、一九八五年)、西村恵「心知りの人」宣旨の娘—『源氏物語』における乳母の位置—(『国文学攷』一六号、一九八七年)、内林瞳「平安文学に見える乳母—『源氏物語』明石の姫君の乳母(宣旨の娘)を中心に—」(『国文橋』二十七号、二〇〇一年)は情事がなかったとする。
- (3) 注(2)西村氏、小山氏の論及び加藤宏文「源氏物語、端役の力—宣旨のむすめの「女心地」—」(『山口大学教育学部研究論叢(人文・社会)』五〇一、二〇〇〇年)
- (4) 注(2)藤本氏の論に同じ。
- (5) 吉海直人「明石の姫君の乳母—『源氏物語』の乳母学—乳母のいる風景を読む—」世界思想社、二〇〇八年)および注(2)内林氏の論に同じ。
- (6) 注(5)吉海氏の論に同じ。
- (7) 『伊勢物語』「布引の滝」には「かへり来る道とほくて、うせにし宮内卿もちよし」が家の前来るに、日暮れぬ」とあるが、実際に「宮内卿もちよし」本人が登場することはない。
- (8) 陳斐寧「宣旨の娘と光源氏—歴史上における宮内卿補任を手掛かりに—」(『国文論叢』三十九号、二〇〇七年)
- (9) 正しくは「源多、源勤」の順である。
- (10) 目安として四十歳以下とする。
- (11) 源道方は任官年が長いいため両方に含めた。
- (12) 以下、【系図】参照。
- (13) 「おじ」や「いとこ」などは、伯父・叔父、従兄弟・従姉妹など不確かなため全て片仮名で表記した。甥・姪はそのまま漢字で記した。
- (14) 注(2)西村氏、注(5)吉海氏の論に同じ。
- (15) 日向一雅「光源氏の王権と「家」」(『源氏物語の準拠と話型』至文堂、一九九九年)、辻和良「桐壺帝の〈姿〉—歴史と物語の接点—」(上原作和編『人物で読む『源氏物語』—桐壺帝・桐壺更衣—』勉誠社、二〇〇五年)
- (16) 日向一雅「桐壺帝と桐壺更衣—親政の理想と「家」の遺志、そして「長恨」の主題—」(上原作和編『人物で読む『源氏物語』—桐壺帝・桐壺更衣—』勉誠社、二〇〇五年)
- (17) 増田繁夫「四 紫式部と中宮彰子の女房たち—中宮女房の職制—」(南波浩編『紫式部方法』笠間書院、二〇〇二年)
- (18) 鈴木一雄編集解説『国文学 解釈と鑑賞別冊 源氏物語(一) 成立論・構想論』(至文堂、一九八二年)、斎藤正昭『源氏物語 成立研究—執筆順序と執筆時期—』(笠間書院、二〇〇一年)

\*引用本文は全て新編日本古典文学全集によった。

『源氏物語』の乳母・宣旨娘背景—父宮内卿を始点として—

【系図】







『源氏物語』の乳母・宣旨娘背景—父宮内卿を始点として—

(清成和)					(文清和徳)		(仁文徳明)			
873.1.13~ 877.10.18 ? (874~876 は 推定)	869.12.8~	863.2.10~ 864.1.16	858.11.2 ~?	858.7.5~ 同.9.14	857.6.19~ 8585.15薨	852.2~ 857.6.18 (856年は 推定)	849.9.26~ 852.2.8卒	837.6.23~ 842? (838~841 は 推定)	836.5.15~ 837.6.23	?~ 836.5.15
源冷	茂世王	源寛	豊江王	源勤	高枝王	源多	滋野貞主	百濟勝義	阿保親王	安倍吉人
正四位下	從四位上	正四位下	從四位上・正四位下	從四位上	從三位	從四位上 / 參議	從四位上・正四位下 / 參議	從四位上・從三位	三品	正四位下
40歳 ~ 44歳		51歳 ~ 52歳	63歳 ~ 67歳	35歳	70歳 ~ 71歳	22歳 ~ 27歳	65歳 ~ 68歳	59歳 ~ 64歳	45歳 ~ 46歳	56歳
(叔父・父の叔父) 仁明皇子	桓武の孫(高祖父の孫)	嵯峨皇子(父の叔父)	光仁の曾孫(祖父のハトコ)	嵯峨皇子(父の叔父)	(父の從兄弟・祖父の從兄弟) 桓武の孫	仁明皇子(弟)	仁明女御・文徳更衣の父		平城皇子(從兄弟)	
	○	○					○			○

『源氏物語』の乳母・宣旨娘背景—父宮内卿を始点として—

		(醍醐 朱雀)				(宇多 醍醐)	宇多	(陽成 光孝)		
939.8~ 9.11薨	?~ 935.7.28薨	925.10.14 ~ 932	920.9.22~ 921.1.30	919.6.3~ 920.2.28卒	917.5.20~ 918.12.6薨	891.12.6~ 916.7.2薨	891.4.11~ 同.9.10卒	882.2.3~ 886	880.2.21~	877.10.18 ~ 879.10.20 卒 (878年は 推定)
紀淑光	藤原兼平	兼覧王	源悦	橘良殖	三善清行	十世王	源興基	源冷	忠貞王	源覚
正四位下 / 参議	従三位	正四位下	一 / 参議	従四位上 / 参議	従四位上 / 参議	従四位上・正四位下・従三位 / 参議	正四位下 / 参議	正四位下 / 参議	正四位下 / 参議	従四位上・正四位下
71歳			57歳 ~ 58歳	56歳 ~ 57歳	74歳 ~ 75歳	58歳 ~ 83歳	38歳	49歳 ~ 53歳	61歳	29歳 ~ 31歳
	嵯峨曾孫 基経の子	文徳の孫か	嵯峨の孫 (祖父の従兄弟)			(祖父の従兄弟・曾祖父の従兄弟) 宇多更衣の父 桓武の孫	仁明の子 (従兄弟)	(叔父・父の叔父) 仁明皇子	桓武の孫 (曾祖父の従兄弟)	仁明皇子 (父の叔父)
○	○				○					

日本古代における「太后」の語義

後三条(一条)	一条			円融	(村上)冷泉	村上
1002.9.24 ~ 1035	?~ 1002.3.12 出家	?~ 980.7.5卒	973.3.2~ 974.1.29出 家 同2.4卒	969.閏5.21 ~ 972.閏2.29	964.7.29~ 968.11.14 止卿	958.9.21~ 964.2.23致 仕
源道方	源尊光	高階良臣	藤原守義	藤原兼通	源重光	藤原元名
正三位・從二位・正二位 / 參議	從四位下	從四位下	從四位上 / 參議	正四位下・從三位 / 參議	從四位上・正四位下 / 參議	從四位上・正四位下 / 參議
35歳 ~ 68歳			78歳 ~ 79歳	45歳 ~ 48歳	42歳 ~ 46歳	74歳 ~ 80歳
(父のハトコ・父のハトコ・祖父のハトコ)	醍醐の孫(父の從兄弟)			冷泉円融の母の兄弟 円融院女御の兄弟 円融皇后の父	醍醐の孫(甥・從兄弟)	父は光孝の從兄弟
		○	○			

\*着任及び解任等の年月日について、いずれか一方が不明な場合、不明な方は「？」を付した。

\*年齢は『公卿補任』等から算出できる人物のみ記した。

\*系譜及び時の天皇との関係については『尊卑分脈』等から辿れる人物のみ記した。

\*再任用されている場合は任官年の順番を優先したため、宮内卿名は一部重複した。

\*表作成には次の資料を用いた。

- 今井堯ほか編『日本史総覧』補巻二(新人物往来社、一九八六年)、笠井純一編『八省補任』(八木書店、二〇一〇年)、増補史料大成 権記(臨川書店、一九六五年)、竹内理三編『平安遺文』(東京堂出版)、『続日本紀』『日本後紀』『日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』『類聚国史』『日本紀略』『扶桑略記』『公卿補任』『尊卑分脈』(「国史大系」吉川弘文館)